

教 仏 名 聞

第 163 号 毎月発行
(発行日) 2024 年 4 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-2 0
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号 17810 番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

聞法者の態度

佐々木蓮磨

宗教、特に仏法は和を説き慈悲を語る道であります。が、ややもすると他宗を批判したり、異教を攻撃しやすいためです。これは深く反省すべきではないかと思えます。

真宗では、宗学の上でよく西鎮今(せいちんこん)ということになります。これは浄土宗の西山派と鎮西派と真宗とを比較対照して、その教義の優劣を論ずる場合に使う言葉であります。これについて味わいの深い話がありますので、それを紹介して反省の資に供(たぐ)したいと思えます。

それは、昔ある同行が、香樹院様に向つて、「和上様、よく学者や説教者が西鎮今の区別を話されますが、それはどういふわけのものですか？」と、お尋ねしたところ香樹院が申されるには「西鎮今の区別というものは、学者の立場から、その説かれていた教説の相違や区別を明らかにするものであつて、おまえたちのように法を聞いて行く同行達の立場から、かれこれと沙汰すべきことではない。むしろ西山上人の教えも、鎮西上人のお勧めも、ともにわれわれ念仏者にとつては、法の深いわけがらを説き、また懈怠勝ちになる自分を励まして下さる教えとしてありがたく頂くべきである。聞法して行く同行としては批評がましいことを言うべきではない。もし聞法者の立場において、他の教えをかれこれと批評するならば、それは聞法者として、道からはずれることになる。お経には『謙敬聞奉行』謙敬して聞きて奉行し」とあり、正信偈には『邪見憍慢の悪衆生は信樂受持すること甚だ以つて難し』とお誠に

誰の教えを聞いても、一人への教えであり、また誠めである。ありがたく受けて行かないと、聞法者の道からはずれて、いつしか恐るべき憍慢同行になり上がつてしまふぞ」と、厳しくお誠に

この香樹院のお誠に、また今日の私どもへのお誠めとして深く味わうべきではないでしょうか。異教や他宗を批評したり、また攻撃したりすることは、聞法者として慎むべきであります。

に過ぎないのです。自分の家の障子の破れから、他家の障子の破れを見て笑つてゐると同じような結果になるのではありますまいか。(了)

【念佛寺発行書籍】

- (一) 『木村無相・お念仏の便り』
- (二) 『松並松五郎念仏語録』
- (三) 『真宗の念仏と信心』
- (四) 『真宗教学の諸問題』
- (五) 『近代教学と伝統宗学の接点』
- (六) 『第十八願を読む』
- (七) 『佛にあうまで』

《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(月)

午前十時始と午後二時始の二座

法話 住職

講題 「我が名を称えよ」

*どなたでも自由にお参り下さい。

対話編 『浄土真宗』

9

B 「仏説無量寿經の法蔵菩薩の物語を話してください」

A 「法蔵菩薩の願行の説法は、摂取不捨の眞実を感得した仏陀が、その眞実のほたらきを私たちが受け取りやすいように、しかも眞実を正しく投影する形で説かれたのであります」

B 「そうお聞きしました」

A 「この物語は、以前にも述べましたが、むかしむかしある王様が世自在王仏の説法に感動し、王としての地位も権力も財産も、破れ草履の如く捨てて、世自在王仏の下で求道者（比丘）になり、仏に成る道を歩みました。この比丘は道を求める中で、この上ない広大な願いを起こしたのです。それは（私は一切の衆生を浄土に生まれしめて仏にしたい）という願いを建て、（この願を成就しなかつたならば法蔵菩薩である私も仏には成りません）という誓願

です。そしてこの願を成就するために、五劫という長い間思索し、四十八通りの願を選んで、これを成就することに よつて一切衆生を救いたいと誓われたのです。そして永劫かけて難行苦行を行われました。しかるに法蔵菩薩は、すでに十劫の昔に四十八願を成就してアマダ仏になって一切衆生の上に、願いの通りにはたらかけてくださっている、という経説です」

B 「そうするとアマダ仏の救いの働きは四十八願の内容によつて知ることができるのですね」

A 「ええそうです」

B 「四十八願の概略をお聞かせください」

A 「四十八願の内容は大きく分けると、衆生が往生し仏となることのできる浄土はこういふ功德のある領域にしたいという願、そして法蔵菩薩ご自身はこうい

う仏に成りたいという願、そして一番大事な、一切衆生をこのようにして浄土に生まれることができるようにしたいという願です」

B 「浄土はこういう領域でありたいという願はどのような内容ですか」

A 「まず浄土は清浄安樂なさとの領域であり、浄土に生まれた者はそこで覺りを完成し仏に成ることができ、迷える世界に還つて衆生を無窮に救うていくはたらきを成就する功德のある世界でありたいと説かれています。たとえば第一願には浄土には地獄・餓鬼・畜生というような苦しみのない安らかな世界にしたいと誓われ、第二願では一度浄土に生まれたならばもう二度と地獄・餓鬼・畜生のよ

うな苦しみの世界に戻らないとか、第三願では浄土に生まれた者の肌はすべて、最も浄らかな黄金の色にな

つて差別がない、そのような浄土を完成したいという願です」

B 「地獄・餓鬼・畜生の世界とは」

A 「地獄は憎しみあい殺しあう世界です。現在の世界もこれがあります。餓鬼とは財力、権力、名譽などを貪りあう世界です。畜生とは抑圧され支配されて自由のない世界です。現代でもいくつも独裁国があり、民衆は抑圧されています。その外に浄土に生まれて仏の覺りを完成したものが、衆生救済をするのでさまざま

な功德を成就することを誓つた願がいくつもあります」

B 「では法蔵菩薩ご自身がこういふ仏になろうと誓つた願はどういう内容ですか」

A 「寿命が量りなく、光明が量りない仏に成り、南無阿弥陀仏の名号として一切衆生に喚びかける仏になりたいという願です。第十二願・第十三願・第十七願です」

B 「以前聴いたことがあるのですが、法蔵菩薩は色も

なく形もない、法性法身から現れたお方だとお聞きしました。その法蔵菩薩がさらに光寿無量の仏に成りたいというのはなぜでしょうか」

A 「それは法蔵菩薩の本質は、法性法身いわば光寿無量の仏であるので、改めて光寿無量の仏に成る必要はないのでしようが、光寿無量の仏となりたいたいという願によつてご自分の本質を顕わにしてください、私たちにアマダ仏の広大なお徳をお知らせくださるのでしよう」

B 「法性法身は光寿無量なのですね」

A 「ええ、そう伺います。寿命無量・光明無量は方便法身の内容というより、法性法身の内容だとうかがいます。よく法性とか法身とか真如とかいわれますが、それだけではその内容がよくわかりません。しかしのち量りなく、光明が量りないはたらき、それこそ法性であり、真如ではありませんが。真如法性は色もなく形もないといわれますが、

なく形もない、法性法身から現れたお方だとお聞きしました。その法蔵菩薩がさらに光寿無量の仏に成りたいというのはなぜでしょうか」

まさに光寿無量のはたらきであり、このはたらきが根本だと思えます。そこからさまざまは方便法身が現れるのではないでしょうか

B 「方便法身とは」

A 「衆生の上にさまざまな形を表して衆生を覺りに導くはたらきをいいます。多くの仏・菩薩がそうですね。そしてそういうはたらきがでてくる本を法性法身とい

います。法性法身から方便法身が生まれ、方便法身によつて法性法身の功德が現し出されるのです。無限定

な真実そのものが、限定い

わば形を表し御名を示して、衆生に御自身を知らせてくださるのです。もし方便法

身がなければ私たちは真実を知ることがありません。法性法身の功德がまさに大慈大悲のはたらきとして純粹に現れたすがたがアミダ仏でしょう」

B 「では衆生を浄土に生まれしめて仏にしたいという願はどのような願ですか」

A 「浄土に往生する道を説かれた願は三つあります。第十九願・第二十願、そし

て第十八願です。十九願と二十願は方便の願といわれ、十八願は真実の願といわれます」

B 「方便の願とは」

A 「方便とは、ちかづくという意味で、十九・二十願は十八願へ帰入せしめるお手立ての願ということで、方便の願といえます。ただしこの場合の方便は真実

のもの、現れではなくて権化方便といわれ、仮に真実へ至らしめる手段としての方便という意味です。ただ

し、アミダ仏は方便法身であるといわれる場合は、真実がそのままかたちをとつた方便で、権化方便ではあり

りません」

B 「なぜ十九願・二十願が説かれているのですか」

A 「それは、私たちの自己は自負心・憍慢心・自己信頼の自力執心が強く、アミダ仏による救済を受け入れ

ず、真実を求める場合にも、こうした自我の側から真実を掴もうとします。真実は自我によつて掴まれません。もし捉まえたとするなら、いよいよ自我が肥大化して、

憍慢となり、自分を絶対化して、多くの人を迷わせることになりかねません」

B 「その自力執心というのはなんですか」

A 「自分の能力を高く見積もり、自分の能力に対して自信をもち、自分の力に深く執着する心です。自分をたのみにしますから、アミダ仏をたのまないのです。自分

自分を信頼してますからアミダ仏を信頼しないのです。いわばへやればできるへが

んばれば得ることができるといふ心です。それは幼い頃から親や学校や社会から、

そう教えられてきたものですから、その意識が強いのです。しかしここでは、頑

張つてこの世の何かを實現しようという場合ではなく、真実無量なはたらきにであ

いたい、目覚めたいという場面に於ては、自力をふりかざして、真実を得ようとして

もそれは不可能だといわれるのです」

自分の努力で真実に向つて努力するのでしようが、(きとり)を開くという点において

は、自力ではダメで真理そのものはたらきが来て

てくれなくては覺れないとよくいわれます。さとりは

いわばへむこうからやってくる)のです。その点浄土真宗は初めから自力ではな

く他力、いわば真理の力(本願他力)を中心にして体系

づけられた教えなのです」

B 「真宗は全面的に本願他力に基づく教えなのですね」

A 「ええそうです。そこで十九・二十願は自力の限界を自覚させて自力をたのむ心

を離れしめる願です。いわば自力では助からないと

いうことを痛切に知らせる願なのです」

B 「それは具体的にはどういう内容になるのですか」

A 「十九願では(浄土往生のために諸善・万行をやつて

みなさい)とお勧めください

ます。それにしたがうことによつて自分は諸善・

万行ができる者でもなく、や

つて見ても真理にあえないと

実感的に知らされます。そこに自分の能力の限界を知らされ、アミダ仏の本願

他力をたのまざるを得なくて

してくださるので、十九願を方便の願といわれるので

す」

B 「諸善・万行は実際には

どういう行いなのでしょう

か」

A 「これは伝統的には、戒律を守り、坐禅瞑想を行い、

經典を読んで理解するなり、

布施行をするなりで、細かく

言えば随分沢山の行がありま

というところに、(我が名を称えるばかりで引き受ける)という十八願のお心を聞く、(もう外ではダメ、この本願に従って私は念仏一つを称えるほかなし)と念仏一つになる。これが二十願に入るということです。これは自分の能力の限界を知り、自分の力ではダメだと感じていたからです」

B 「十九願で諸善・万行によつて救われようと励んでも、いつまでたつても真理にあえないことになって、もう自分は自分の為す諸善や諸行ではダメだとなる。しかるにアミダ仏の本願は(念仏もうすばかりで助ける)と仰せくださっている、あとはただ念仏するばかりだと、念仏一つをたのみにするのが二十願なのですね。二十願のお話を聞くと十八願のお心と違わぬように思われますが、それはどうなのでしょう」

A 「端的に申しますと、十八願の念仏往生の願の仰せである(わが名を称えよ、必ず助ける)と聞いて、(ああり難い、こんな者を)

とこの願の大悲心を聞くだけでもうなにも云うことなし、と満足しているのが十八願のお心を本当に受け取ったすがたです。そうではなくて(わが名を称えるばかりで助ける)との第十八願を聞いて、(もう念仏一つでよかった、ただ念仏申すばかりである)あるいは(もう念仏一つしかない、ナンマンダブ、ナンマンダブ)と受け取っている場合はまだ二十願の立場だといえましょう」

B 「(もう念仏一つでよかった、称えるばかりである)と受け取っているのは十八願を受け取っているのではないのです」

A 「ええそこが非常に微妙なところで、(称えるばかりでよかった)と聞いて、なお(念仏を称える)というところに、自分の称える念仏に力が入っているといえましょう。実はもう自分が称えるとか称えないとかは一切用がなくなつて、ただ(こんな者を)(如来様ばかり)とアミダ仏のお助けばかりを仰いでいる、

自分の称えることさえ問題ではなく、まるまる引き受けてくださることを仰いでいるばかり、それが十八願です」

B 「十八願と違つて二十願にはなお問題があるのですね」

A 「ええ二十願はなおアミダ仏を全面的におまかせしていない、万策尽きてもなお念仏を称えるばかりとか、称えて行けばアミダ仏にであえるという、自分でも意識できないほどの自己信頼の心が残っているのです。どこかでまだ自分は本当にアミダ仏にであつていない、しかし念仏称えていけばいつかは助かるという無意識的な計らいがあるので、それほど自力の執心は根深いのです」

B 「では二十願から十八願へはどうしたら入れるのですか」

A 「自分の力ではいけません。アミダ仏の本願の大悲のはたらきによつて他力一つに転じられるのです。それを果遂の力といえます。二十願の念仏に果遂の力が

こもっているのです」

B 「具体的にはどういう力ですか」

A 「二十願で、念仏一つを称えながら念仏往生の願の大悲心を聞く。称えては聞き、聞いては称えるなかで、称える念仏の中に籠もつていく(そんなお前をまるまる引き受けている、なにもいらない)という大慈大悲の心がおずからその人に浸透し潜み入つて、遂に(ああそうであつたか。もうこのアミダ仏にまるまる引き受けて頂くほかに一切なにもなかった。今まで自分の方ばかりを見ていたが、自分にはまったくチリばかりも助かる縁も無く、しかも助かるための用意も何も必要がなかった)と知らされるのです。それが十八願への転入でありましょう」

B 「十九願と二十願は十八願に入らしめたもう方便の願であることはわかりました。では十八願のお心を詳しくお話しください」

A 「次回に致しましょう」

(了)

【住職雑感】

三月二十二日、

念佛寺彼岸会のあと、帰敬式を執行。四名の人が受式された。真宗宗歌を歌い、三帰依文を同唱。その後おかみそり(――実際に剃るわけではない)を一人ひとりに執行して、導師は執行の辞を述べ、受式者は誓いの辞を述べる。その後簡単なお話をし、修行をして終わる。次回は秋のお彼岸に執行したいと思つている。法名は積尊のお弟子としての名であつて、死んだ人の名ではない。仏教徒になつてこれからは法を聞く人生を送りますという帰敬式を受けると与えられる。生前中にいただくのが本来である。

三月二十三日は高校同期の最後の同窓会というので、一泊泊まりで参加。参加者は少ないと思つていたが八十数名で大いに盛り上がった。高校卒業以来初めてあつた人もいて、再会を喜んだ。若い日の美少年美少女の姿はないが、お互いこの年齢まで生きてきたことは不思議である。周りの人から「死んだら何も無くないと思つているが、どうなのか」と問われたり、また「どうして坊さんになつたのか」とか、「あんたの話が聞きたい」と言われたのは予想外だったが、皆そろそろこの世を終える年頃になると宗教的な関心が起つて来るのであろうか。